

住民の国際色を活かした地域づくり

～生野 코리아タウンでの取り組み～



特定非営利活動法人 코리아 NGOセンター 代表理事
郭 辰雄

大阪市生野区。以前は猪飼野と呼ばれた日本最大の在日コリアンの集住地域である。総人口約13万人のうち2割にあたる約2万7,000人が韓国・朝鮮籍を持って暮らしており、古くから 코리아の食文化をはじめとする異文化が息づいてきたまちである。

JR、近鉄、地下鉄の3路線が交錯する鶴橋駅を降りると、甲子園球場2個分の敷地に、約700店舗、6つの市場や商店街からなる大阪鶴橋市場が広がっている。焼肉などの飲食店や 코리아の食材、民族衣装などの店が軒を連ね、「国際市場」として賑わいを見せており、それ以外にも食材、乾物、日用品、衣類など、さまざまな店が立ち並んでいる。

そこを通り抜け、15分ほど歩くと、生野 코리아タウンと呼ばれる御幸通商店街に到着する。約120店舗が集まる 코리아タウンと鶴橋駅界隈は、近年では、いわゆる「韓流ブーム」の影響もあって、メディアなどにも取り上げられるようになり、観光スポットとしても注目され、週末ともなるとガイドブックを手にした人たちがショッピングや食事を楽しんでいる姿も多く見られる。

その一方、そうした人々以外にも、生野 코리아タウンには異質な他者との豊かな出会いと学びを求めて数多くの人たちが訪れている。

코리아 NGOセンターは、2004年3月に在日コリアンが中心になって設立したNPO法人である。そのミッションとして、①外国人の人権保障と多民族・多文化共生社会の実現、②在日コリアン社会の豊かな社会基盤の創造と 코리아ン・ネットワークの構築、③南北 코리아の平和統一と南北・日本の市民社会の発展、

「東アジア共同体」への寄与を掲げ、さまざまな事業をおこなっている。そのひとつとして、生野 코리아タウンで学びを求める人たちのニーズにこたえるためのフィールドワークや講演会、キムチ作り体験、ハンゲル入門講座、朝鮮の伝統楽器体験などの多彩な研修プログラムを、地域の商店の方々と共に協力しながら運営している。このプログラムには全国各地からの修学旅行生や学校の校外学習、地域の人権推進協議会や国際交流団体など、毎年1万人近くの人たちが参加しており、生野 코리아タウンは、生活の場であると同時に、地域全体が「まちの学校」としても位置づけられているのである。

■生野 코리아タウンの歴史

生野 코리아タウンが形成されてきた歴史は、近現代の日本と朝鮮半島の歴史と深く関わっている。

1910年、朝鮮半島は日本の植民地となった。当時朝鮮は土地を主な生産手段とする農耕社会であり、その土地は個人が所有するものではなく、農村の人々が共同で所有するものとして管理してきた。しかし朝鮮を植民地支配した日本は、土地調査事業によって期限を決めて土地の所有者を明確にし、登記を徹底するように求め、それが明確でない土地は、所有者不明として総督府が接収し、日本人に払い下げた。

その結果、多くの朝鮮人はそれまでの生活の手段であった土地を手放すこととなり、生活が困難になっていった。こうした朝鮮人の生活状況の変化が、朝鮮半島から日本への大

特集 これからの地域の国際化施策の新たなデザイン

規模な人口移動を促した。日本と朝鮮の人口移動が拡大するなか、1920年代になって大阪と済州島を結ぶ貨客船として「君が代丸」が就航したことにより、大阪がいわば朝鮮半島からやってくる人たちの重要な玄関口となったのである。

当時の大阪は、「大大阪」と呼ばれ、面積、人口、産業などあらゆる面で日本最大の都市であり、生活の糧を求める多くの朝鮮人が殺到し、工場労働者や土木労働者、畜産などの仕事に従事することとなった。生野コリアタウンの東側には平野川が流れているが、この川は1920年代に入って本格的に実施された大規模な改修工事で、この地域の複数の河川を埋め立てて新たに整備された川であり、その工事にも多くの朝鮮人が従事していた。

こうして現在の生野区を中心にして、大阪に大規模な朝鮮人の集住地域が形成されていった。

朝鮮人の集住地域の拡大にともない、食材や生活必需品などのニーズが高まり、必然的に「市場」を形成していくこととなった。その頃、現在のコリアタウンと呼ばれる商店街は御幸森神社の参道として日本人の商店が立ち並び、その南側の路地に露天で軒先に商品を並べて朝鮮人が商売をしていた場所が朝鮮市場と呼ばれていた。それが戦争の本格化にともない疎開や徴兵のため空き店舗となったり、戦後の物資の不足で商売をたたむ店が増えてくることとなった。そこを朝鮮人が買い取ることによって、露天から始まった朝鮮市場が表通りに移り、現在の商店街が形成されてきたのである。

このように生野コリアタウンは、日本と朝鮮半島の近現代の歴史によって生み出されたまちともいえるのである。

■古代の朝鮮半島との交流の拠点

一方で、生野コリアタウンは古代からの朝鮮半島との交流の歴史をいまに伝える場所でもある。生野コリアタウンの西側には御幸森

天神宮がある。この神社はその起源が西暦406年といわれる由緒ある神社で、この地域の氏神として親しまれている。

この神社は、4世紀に現在の大阪市中央区のあたりに都をおいて倭国を治めた仁徳天皇を奉っており、御幸森という地名も仁徳天皇がこの地をよく訪れていたことからつけられた地名であると伝えられている。仁徳天皇がこの地を訪れた理由のひとつは鷹狩りを行うためであり、もうひとつは朝鮮半島、特に百済からの渡来人たちとの交わりを求めてのことであったといわれている。当時、倭国には朝鮮半島から来た渡来人によって大陸の先進文化が伝えられ、それが倭国の発展に大きく寄与したが、生野コリアタウン周辺には、仁徳天皇が渡来の技術を活かして造った日本最古の橋といわれる「鶴の橋跡記念碑」や日本に漢字を伝えた王仁博士が詠んだといわれる「難波津の歌」の歌碑が地域の人たちの募金によって建立されており、この地を訪れる人たちに古代から続く朝鮮半島との交流の歴史を伝えている。

こうした古代から近現代にいたる朝鮮半島との歴史、これも生野コリアタウンの大切な地域資源となっているのである。

■朝鮮市場から生野コリアタウンへ

朝鮮市場と呼ばれた商店街はいつからコリアタウンと呼ばれるようになったのだろうか。

1980年代くらいまでは朝鮮市場は地域の人たちだけではなく、仕入れに来る人たちや地方の人たちで賑わいを見せていた。というのも、まだ当時はコリアの食文化が日本に一般的に受け入れられている状況ではなく、キムチをはじめ食材などを朝鮮市場に買いに来るのが一般的だったので、朝鮮市場は幅広いニーズに支えられ、市場としての高い独自性を持っていた。

しかし1980年代以降から徐々に朝鮮市場の集客力は衰え、空き店舗も目立ち始めるようになった。

その理由として在日コリアン社会の変化、特に朝鮮半島からやってきた一世から日本生まれの二世、三世への世代交代があげられる。日本生まれの世代が中心になるということは、食生活の変化、極端に言えばキムチがなければ食事ができない世代から、キムチがなくてもかまわない世代への変化であり、コリアの食材へのニーズが減少していくこととなる。また、冠婚葬祭などで必要なコリアの伝統的な食材や衣装などのニーズも減少することで、当然売り上げが減少し、地域の衰退が避けられない状況となってきた。

こうした状況に危機感を抱き、なんとか打開しようと、商店街の在日コリアンの店主たちを中心にしてそれまでの各商店がそれぞれ企業努力をすると同時に、全体をボトムアップするために「地域」をどう活性化するかということが本格的に議論されるようになり、それが「コリアタウン構想」につながっていった。

当時は1988年のソウルオリンピックをきっかけとして、日韓の人的交流や文化交流が急激に拡大し、コリアの食に対する見方も変わり始めた時期でもあり、1990年代に入ると、以前は「朝鮮漬け」と呼ばれ、どちらかといえばコリアに対するネガティブなイメージを象徴する食べ物であったキムチが、スーパーやコンビニの店頭に並び始めるようになっていく。

また1980年代後半からの急激な円高とバブル景気のもとで、日本の外国人人口は1990年代以降急激に増加し始め、「内なる国際化」が地域のなかでも政策課題として語られるような状況にもなってきた。

いま生野コリアタウンのランドマーク的な存在となっている「百済門」が建てられたのが1993年から94年にかけてであり、朝鮮市場はちょうどこの時期あたりから、コリアタウンと呼ばれるようになっていくのである。

■地域の活性化に必要なもの

冒頭述べたように、いま生野コリアタウン

は朝鮮市場と呼ばれた時代から大きく変わりつつあるが、こうした変化は何によってもたらされたのだろうか。よく物事を成し遂げるときに必要な要素として「天の時、地の利、人の和」といわれるが、これに即して整理を試みたい。

まず、「天の時」であるが、いま日本全国で「韓流」ブームがいわれ、東京の新大久保などでもまるで韓国の繁華街がそのままきたような印象を与えるまでになっている。もちろんこうした時代潮流が生野コリアタウンにも大きな影響を与えており、これまでとは違う層が足を運ぶようになり、韓流ショップなど新しい店舗も生まれている。

一方で、外国人人口の増加と少子高齢化という状況のもとで、日本社会のなかでも「多文化共生」が政策課題として語られるようになっており、「共生のまち」としてのメッセージ性も高まっている。こうした時代の潮流は生野コリアタウンの活性化にとってまちがいない追いつき風となっている。

次に、「地の利」としては、鶴橋駅から生野コリアタウンまでの大規模な市場、交通の便などの立地条件ももちろんだが、前述した生野コリアタウンが持つ「歴史」と在日コリアンの集住地域としての特殊性があげられるだろう。こうした地の利が、利便性のみならず、「まちの学校」としての生野コリアタウンの価値を高め、多くの教育機関、団体が訪れる要因となっているのである。

最後に、「人の和」であるが、時代状況や地域のリソースがあってもそれを活かす主体がなければ活性化にはつながらない。生野コリアタウンでは、商店街の各店舗が独自の経営努力をおこない、地域の活性化に取り組んできたことはもちろんであるが、それ以外にも多様な層が関わっている。例えば2002年日韓サッカーワールドカップ共催のときには、地域の日本人、在日コリアンに広く呼びかけて共同観戦会を開催したり、商店街のイベントでも地域の伝統文化保存会や民族学校をはじめ

特集 これからの地域の国際化施策の新たなデザイン

めさまざまな団体と協力している。

もちろんコリアNGOセンターでも、大手旅行代理店などとも提携して生野コリアタウンを研修などで訪れる人たちへのプログラムの実施や修学旅行生などの誘致をおこなっており、またイベント実施にあたっては緊密な協力関係を持っている。

このように商店街のみならず、行政、企業、マスコミ、NPOなどさまざまなセクターがつながりあうことで、地域の魅力を発信しながら地域の活性化をはかれているのが生野コリアタウンの成功の要因でもあるといえる。

■おわりに

生野コリアタウンはさまざまな意味で魅力あふれる地域であるが、私たちコリアNGOセンターがこの地域の活性化に関わっているのは、それがこの地域に暮らす人々の大切な課題であるのと同時に、生野コリアタウンが注目され、関心をもたれることが、普遍的な問題に結びついているからである。

日本社会は今後、外国人人口の増加と少子高齢化により、不可避的に多民族化が進んでいかざるをえない。そのときに国籍や民族、言語、宗教、文化など「ちがい」を認め、尊重することで、互いの豊かさにつなげる、そうした「多民族・多文化共生」の関係をどのよ

うにつくっていくのか。これは、これからは生きていく私たちが避けて通ることのできないテーマとなっている。

同時に、これからのグローバル化の進展は、日本と朝鮮半島を含めた東アジアという地域の相互理解と協力の必要性をよりいっそう高めている。

生野コリアタウンは、植民地時代をその起源としながら、差別と偏見のなかで在日コリアンが生き抜いてきた場所であり、同時にそうした経験をふまえ、これからは生きるために「共生」の意味や大切さをメッセージとして発信している地域である。

この地域がより活性化することで、より多くの人たちにこのメッセージを伝えることができると思う。



著者略歴

郭 辰雄 (カク・チヌン)

大阪生まれの在日コリアン3世。神戸学院大学卒業。大学を卒業して、在日コリアンの人権団体職員として勤務し、現在コリアNGOセンター代表理事を務める。2009年まで大阪弁護士会市民会議委員も務めており、外国人が急増して多民族化が進む日本社会の中で外国人の「人権」の視点から、差別をなくして共生することの大切さをテーマに、教育機関や各種団体などで講演・研修を多数行っている。